


(シラバス No.7) (基盤科目)

科目名	研究方法特別演習Ⅶ 英語名: Special Seminar on Study Method Ⅶ	必修/選択	選択必修	
		単位数	2 単位	
		担当教員	石原 朗子	

【授業概要】

教育実践に携わる研究を行う学生は、教育現場の状況に即した研究のアプローチができることが求められる。本科目では、初中等教育もしくは高等教育の分野で実践に根差した実証研究を行うことができるよう、教育社会学で主に用いられる研究（量的研究法、質的研究法、混合研究法）について扱う。具体的には、質的研究において、データに根差した理論を構築するグラウンデッド・セオリー・アプローチ、質的データを量的に検討するテキストマイニング等の質的データの分析、および、従来からある実証研究の代表手法である質問紙調査とその分析、それらの複数を組み合わせることで、より多面的に深く現場に迫るトライアングレーション、あるいは混合研究法を学修する。その上で、博士研究指導Ⅰで明確化したテーマ・リサーチクエスチョンを研究計画の中に落とし込めるよう学修の成果を研究デザインとして明確化していく。

【キーワード】

研究デザイン、量的研究、質的研究、トライアングレーション、混合研究法

【授業の到達目標】

- ・量的研究法と質的研究法の発想の違いを理解できる。
- ・量的研究法と質的研究法の代表的な手法のいくつかを理解し、特定の手法については実施ができる。
- ・主要な研究手法を理解したうえで、自身の研究デザインの中にどの手法が適しているかを明示でき、博士論文の研究手法の部分の章においてその記述ができる素地を持つことができる。

【スクーリング実施の有無】

スクーリングの実施【あり】 スクーリングのメディア受講【可】

【授業計画】

回	内 容
1	オリエンテーション 本演習のねらい・進め方
2	研究デザインの枠組みと文献レビューの活用
3	量的研究法と質的研究法－発想の違いとそれぞれにおける質担保－
4	質的研究法 (1) 実践現場への参入と質的データ収集における倫理・手法
5	質的研究法 (2) データに根差した理論を構築するためのグラウンデッド・セオリー・アプローチ
6	質的研究法 (3) 質的データを量的に扱うテキストマイニング
7	量的研究法 (1) 各自の課題からの仮説の導出
8	量的研究法 (2) 質問紙調査の実際と適応可能な分析手法の選択の検討
9	トライアングレーション (1) 現場を多面的に見るためのデータのトライアングレーション
10	トライアングレーション (2) 仮説をつくり検証するための方法論でのトライアングレーション
11	研究結果のまとめ方 (1) 先行研究からまとめ方を学ぶ
12	研究結果のまとめ方 (2) 自身のテーマに沿った方法論とまとめ方を構想する
13	自らのテーマやリサーチクエスチョンを踏まえた研究方法の検討 (1) 研究手法の選択と研究デザインの策定
14	自らのテーマやリサーチクエスチョンを踏まえた研究方法の検討 (2) 研究デザインの改良

15	まとめ－研究の限界を知る－
試験	
<p>【履修にあたっての準備・履修上の注意点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研究方法に関する何らかの授業を修士課程・専門職学位課程で受講していることが望ましい（例：教育学研究科修士課程における研究方法論、教育実践研究科専門職学位課程における教育社会学特論、あるいは他大学における量的研究、質的研究の両方又はいずれかを扱った授業など）。研究方法に関する授業を未履修で本科目を受講する場合は、事前に相談すること。 ・履修においては、質的研究、量的研究の両方を扱うため、すでに既習の範囲がある場合は、学生の既修得内容により履修順序を前後させることがある。履修の順序については、学期初めのスクーリングで相談を行う。 ・本科目においては、指定されたテキストを読み、理解をした上で、実践してみることが、理解と修得の近道となる。入学時の研究計画に基づき、適切なサイズの取組を1つは実践してみることを推奨する。 	
<p>【スクーリングでの学修内容】</p> <p>スクーリングは、学修の初期に、授業の目的や学修の概要を知り、この科目を通じて何をめざすかを学生と教員が相互に確認するために行う。このスクーリングでは、各学生がすでに学んで身につけていることは何か、今までの大学院の学修で身につけていないことが何かが明らかになるよう、学生は、事前に修士課程等で学んできたことを説明できる準備を行い、スクーリングに臨むことが望まれる。また、スクーリング後は、自身が特にこの科目で重点的に学ぶべきことが何かを明確化できていることが望まれる。</p> <p>学期の途中では、質的研究、量的研究の学修段階で、各1回程度、短時間のスクーリングを実施し、理解と定着を確認する。</p> <p>さらに、学修の終期に、学修のまとめとしてスクーリングを行う。このスクーリングでは、各自が入学時の研究計画をさらに精緻化した研究デザインに基づく計画書（またはその原案）を事前に準備し、スクーリングにおいて提示することが求められる。スクーリング後、各学生は計画書に基づいた実践に入る（進捗によっては、科目途中で計画書の内容を実践しても良い）。</p> <p>スクーリングは上記の4つの時期を含み、合計4コマ6時間以上をめぐり行う。</p>	
<p>【評価方法】</p> <p>合否については、研究計画・方法に関するプレゼンテーション・レポート（50%）、科目修得試験（50%）で評価する。</p>	
<p>【テキスト】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・J. W. Creswell 著『研究デザイン 質的・量的・そしてミックス法』日本看護協会出版会，2008年 ・木下康仁著『修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い』弘文堂，2003年 ・須藤康介ほか著『文系でもわかる統計分析』朝日新聞出版，2012年 <p>その他、授業時に必要に応じて提示する。</p>	
<p>【参考図書】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・B. G. Glaser & A. L. Strauss 著『データ対話型理論の発見』新曜社，1996年 ・Uwe Flick 著『新版 質的研究入門』春秋社，2011年 ・近藤克則著『研究の育て方：ゴールとプロセスの「見える化」』医学書院，2018年 ・E.M.フィリップス，D.S.ピュー著『博士号の取り方 学生と指導教員のための実践ハンドブック（第6版）』名古屋大学出版会，2018年 ・中室牧子・津川友介著『「原因と結果」の経済学 データから真実を見抜く思考法』ダイヤモンド社，2017年 ・北川由紀彦，山北輝裕著『社会調査の基礎』放送大学教育振興会，2015年 ・林拓也著『社会統計学入門』放送大学教育振興会，2018年 	
<p>【教員メッセージ】</p> <p>皆さんの多くが、修士課程や専門職学位課程において、何らかの研究手法を用いて分析をし、論文</p>	

をまとめた経験があると思います。本授業では、さらに一歩進んで、複数の研究手法の発想と実際の手順を知ること、自身の実践研究や実証研究において、どのような方法論が最も適しているかを考え、その上で実践ができることを期待します。実践研究には、実践家だからこそその困難もありますが、だからこそ、現場の実際と研究の方法の深い理解をもって、実現可能な研究を設計し、実現していきましょう。

【備考】

特記事項なし